一般部門

手

【佐々木（ささき） 良子（りょうこ）・東京都】

第3回 忘れられない看護エピソード 一般部門 優秀賞

ぐるん。ぐるん。ぐるん。大きな渦の中から飛び出すように目が覚めた。意識が戻ったのは、事故から1週間後のことだ。運転中に意識を失い、ガードレールに激突、車は原型をとどめないほどに大破した。そんな中、奇跡的に助かった私は、第4頸椎骨折、脳挫傷、肺挫傷、左股関節脱臼に左膝靭帯断裂。生きていたのが奇跡だと言われた。

事故前後の記憶は全くない。大けがはしていても、じきに歩いて退院できると思っていた。それが、歩くことはおろか、息をすることすらできない。首から下の感覚が全くないのだ。まるで手も足ももげてしまったかのようだ。意識が戻り、ICUでの時間は想像を超えるつらさだ。昼夜の区別もない。たくさんの管につながれ、生かされている。ただ天井だけを眺め、シュー・スコン、シュー・スコンと機械音だけが響く。

生きていて良かったのだろうか。絶望感に襲われる。呼吸が乱れればアラームが鳴る。家に帰るどころではない。こんな状態で帰っても迷惑になるだけ。生きた屍（しかばね）とは私のことだ。なぜ助かってしまったのだろう。そんな時、1人の男性看護師さんが洗面器にお湯を入れて持ってきた。「佐々木さん、手を洗いましょうね」と。手を洗う？何にも感じない手を洗ったって、と思ったが気管切開で声も出ない。無口なその人は、手を洗っている間ほとんどしゃべらない。次の日も次の日もその人は私の手を洗ってくれた。せっかく洗ってくれても、何も感じない手にやるせなさで涙がこぼれた。すると、そっと涙を拭きながら、「ぼくにできることはこれくらいなので」と言った。

たくさんの機械につながれて、一言も話すこともできない私を、人として扱ってくれたことがうれしかった。生きることを真っ先に諦めていたことが恥ずかしかった。その人は、手を洗うことで、私の心の中の不安を少しでも洗い流そうとしてくれたのかもしれない。あなたは生きている。だから諦めないでと。